麻　布

次の文章を読み、設問に答えなさい。

あれは私が都内の編集プロダクションで編集の仕事にたずさわっていたころのことだった。当時の私は入社三年目、独自の判断でこなせる作業のはば も、任される仕事の種類も増えていた。そのうちのひとつがタウン誌編集だった。

ある日、〈近所のプチ事件〉というコーナーあてに一枚のハガキが届いた。

「わが家の近所でこんなことがありました。一人暮らしのおばあさんがカミツキガメを飼い始めたのですが、そのカメがあれよあれよと成長し、おばあさんの手にａ才えなくなってしまったのです。そこで、近所の子供たちがカメの世話を手伝い、新しい飼い主探しを始めました。先日、無事に飼い主が見つかり、一安心。社会情勢のおだやかならざる昨今、久々に心がなごんだ小事でした」

〈近所のプチ事件〉はその名のとおり、町内で起こったささやかな出来事を紹介するコーナーだった。読者から届いた投稿ハガキをもとに、実際に私が現場へおもむいて取材をし、当事者たちの談話を交えた事件仕立ての記事にする。他愛のない内容であるほど不思議と読者に喜ばれた。

おばあさんとカミツキガメ。

その悪戦苦闘を援護する近所の子供たち。

イケる――と、その構図をうかべた私は直感した。ユーモアとぬくもりの混在するちょっといい話になるだろう、と。

さっそく、ハガキをくれた投稿者に問い合わせ、カメを飼っていたという老婦人に取材の申し入れをした。

長崎美代子さん。それが、忘れもしないあの人だった。

「ええっ、私がタウン誌に？　カメの話で？　あら、まあ、どうしましょう。そんな、記事にしていただくほどの話じゃないんですけど」

長崎さんは当惑の声を出しながらも取材を※①快諾してくれた。落ちつきのあるやさしげな声だった。この人ならばだいじょうぶだと私は自信を深めた。

そこに油断が生じた。

「六年前に主人を亡くして、それからはずっと一人です。一人むすこは三年前にアメリカへ移住して、孫まで連れて行っちゃって。お客さんをおむかえするのは久しぶりだから、はりきってそうじをしたんですよ」

電話で受けた印象とたがわず、長崎さんはおだやかな品のいい女性だった。「おばあさん」と呼ぶのに抵抗を覚えるほど、見た目はしゃっきりとしていて声にもつやがある。

「いえいえ、もうおばあさんですよ。今年で七十三ですし。私なんかの話をタウン誌にのせていただくなんて、申し訳ないくらい。でも、せっかく来てくださったんですから、どうかゆっくりなさっていってください」

かおりのいいお茶とお茶菓子を供され、恐縮しながらも取材を開始した。

「ではまず、カメとの出会いからうかがいたいのですが」

当時使っていた※②カセットテープを回しはじめて間もなく、長崎さんの記憶力の良さに気がついた。新しい飼い主のもとへ行って半年になるというカミツキガメのことを、彼女は細部までよくおぼえていた。ときどき話が※③脱線するきらいはあったものの、根気よく待てば再び本筋にもどり、おかげで私は聞き役に徹していればよかった。

取材に要した時間は約一時間半。〈近所のプチ事件〉は八百字の小さなスペースで、一時間も話を聞けばじゅうぶんに記事として成立する。長崎さんの追想はまだ続きそうだったが、終盤に入って脱線がさらに増えてきたあたりで、私がさりげなく※④話をしめの方向へと誘導した。

早く会社へもどらなければと気がせいていたのは事実だ。デスクには常時仕事の山があり、その夜も終電に飛び乗るはめになるのは必至だった。正直に白状するならば、①前日もあまりねていなかった私は取材中、長崎さんのたんたんとした声色にさそわれて何度か意識を失いかけたりもした。

「大変いいお話を聞かせていただきました。きっと読者のみなさんにも喜んでもらえると思います」

ようやく頭がさえてきたのは長崎家を辞去し、会社へともどる道々だ。今、聞いた話をどのようにまとめるか。さっそく、構成を練りはじめ、会社へ帰りつくまでにそれは完成した。いや――本当を言えば、②長崎さんを訪ねるまでもなく、投稿ハガキを読んだ時点で記事のイメージはおおかた固まっていたのだ。

近所の住民から寄せられたハガキと、実際に長崎さんから聞いた話とのあいだには、しかし、※⑤若干のそごもあった。長崎さんは自らカミツキガメを望んだわけではなく、顔見知りの子供に※⑥ほだされて飼いはじめたのだ。

隣家に住む九さいの少年が近くの川岸で一ぴきのカメを見かけた。放っておけずに拾って帰ったものの、母親は「生き物を世話するよゆうなんてない」と一蹴。川へもどしてきなさいと命じられ、家の庭先で泣いていたところに通りかかった

のが長崎さんだった。

——代わりに飼ってほしいってたのまれて、いやとは言えなくて。亮くんのことは赤ちゃんのころから知っていて、小さいころはよくうちにテレビをみにきたりもしていたんですよ。ちょっと内気だけど、本当にいい子で、心がやさしくて。

——もちろん迷いもありましたけど、しょせんはカメでしょう。そう思ったんです。犬やねこならまだしも、カメ一ぴきくらいだったら、こんなおばあさんでも飼えるんじゃないかしら、って。

——それがね、大まちがい。すごいんですよ。カミツキガメの成長する速さといったら。食いしんぼうだったせいかしら、最初は私のてのひらくらいだったのが、見る見る大きくなって、巨人のグローブみたいになっちゃって。仕方なく何度も水そうを買いかえましたよ、ええ。

——大きくなると、その水そうが重くてね。水をかえるだけでも難儀なのに、週に何度かはカメに日光浴をさせたほうがいいって、ペットショップの方に言われて。もう私、頭をかかえちゃって。

——そうしたら亮くんが、きっと責任を感じたんでしょうね、いっしょに手伝ってくれたんです。最初は亮くん一人で、でも、だんだん他の子供たちも集まってきて……。ええ、近所の子たちがぞろぞろと。庭で日光浴をするガメラを見て、何かおもしろいと思ったんじゃないかしら。そう、ガメラ。亮くんがつけたカメの名前です。

——カメといっても、ミドリガメなんかとは全然ちがうんですよ。なんせカミツキガメは肉食ですし、見た目も肉食獣というか、怪獣じみているんです。それに、大変なばか力の暴れんぼうで。一度なんて、水そうのガラスを頭つきで割ったこともあるんですよ。あのときは腰をぬかしたわ。アクリルガラスの水そうなら割れないってペットショップの方に聞いて、あわてて買いに走りました。

——本当にあのころは毎日、大さわぎで。bホウカゴになると子供たちがどやどや集まってきて、それはそれはにぎやかだったわ。カメにえさをあげるより、子供たちにおやつをあげるほうが大変だったくらい。あげもちだとか、ふかしいもだとか、こんなおばあさんだからしゃれたものは作れませんでしたけど。

——もらい手が見つかったとき……ええ、おどろきましたねえ。手のかかるカメですし、まさかそんな方が現れるなんて。ガメラは今、新しいお宅でカメラって名前で呼ばれているそうです。ええ、いい名前だと思いますよ。ガメラよりも、カメらしくて。

③九十分間回しつづけた取材のテープを、結局、私は一度も再生することなく記事に取りかかった。聞き返さずとも重要なポイントはノートに書きつけていたし、記憶にもリアルに残っていた。八百字のスペースをうめるにはそれでじゅうぶんだった。他愛なくもほほえましい事件に仕立てる手ごたえもあった。

一人のおばあさんとカミツキガメ、そして子供たちが織りなすドタバタ劇。老骨に鞭打っての奮闘の末、見事、救世主を探し出して一件落着。

最後は長崎さん自身の言葉で少々ほろりとさせるのもいい。取材の終わりに物思い顔でつぶやいたあの一言だ。

——今、思うことは……あの子、元気かしらって。本当に、新しいところでもちゃんと食べていればいいんですけど。

平和な日常を取りもどした今もなお、長崎さんの中に残るガメラへの愛情。結びはこれで決まりだ。

私はかつてないほどスムーズに原稿を書きあげた。「いいねえ、ほのぼのしてて」と会社の先輩にもほめられた。

刷り上がったタウン誌は謝状と共に長崎さんへcユウソウした。

会社に丁重なお礼の電話をもらったのは、その数日後だ。

「本当に恐縮しております。つまらないおばあさんの話を、あんな風に取りあげていただいて」

相変わらず謙虚な長崎さんに、「そんなことないです」と私は返した。

「すてきなお話でした。おかげさまで評判も上々です。心がほっこりしたとか、ガメラが幸せになってよかったとか、たくさんのお声をいただいていますよ」

多少誇張して伝えたとたん、受話器の向こうが沈黙した。

「長崎さん？」

「ええ、ありがとうございます。でも……」

でも、と確かに長崎さんは言った。かすかにしずんだ声色だった。が、それ以上は語らずに彼女は話をくくった。

「一言お礼を申し上げたかっただけです。おいそがしいのに、ごめんなさいね」

事実、きついしめきりをかかえていた私は「でも」の理由を追求しようとせず、口早に謝意を返しただけで受話器をもどしてしまった。

④記事のできには自信があった。当事者の思いと記事とのあいだに若干の※⑰乖離があるのはさけられないことだが、こうしてわざわざお礼の電話もくれた。たとえ彼女が「ちょっとちがう」と感じたところがあったにしても、基本的には満足してくれたものと信じて疑わなかった。

同タウン誌の取材で町内のパン屋をめぐっていた道中、たまたま長崎さん宅の近くを通りかかったのは、それから一年後のことだった。

記憶をたよりに長崎さんの家を探し、門の前に立った。わずか一年、なのにその庭は無秩序にはびこる雑草に占拠され、ひどくすさんだ風情を呈していた。よく見ると、ポストの上にあった『長崎』の表札が外れている。

そのまま立ち去る気になれず、私は隣家の呼び鈴をおした。

「おとなりの長崎さん、どちらかへお引っこしされたのでしょうか？」

玄関のとびらから顔を出した主婦にたずね、返ってきた言葉に愕然とした。

「長崎さんは半年ほど前に亡くなりました」

「え」

まさか、と耳を疑った。

「そんな、どうして……」

説明を請うようにつぶやくも、四十代とおぼしき主婦の顔には警戒の色がありありとうかんでいる。私は名刺を差しだした。

「申しおくれましたが、この町のタウン誌を編集している中塚と申します。以前、取材で長崎さんをお訪ねしたことがありまして」

主婦の表情が一変した。

「ああ、あのカメの話、あなたが書いたの？」

「はい、一年ほど前でした。あのころは長崎さん、とってもお元気そうだったのに……信じられません」

「とつぜんだったのよ。※⑱心筋梗塞。お一人暮らしだったし、発見されたときにはもう亡くなって三日たっていたそうで。私たちももっと気をつけていればよかったんだけど」

孤独死。頭にうかんだむごい一語に小さなふるえが走った。それでも、職業柄か表面上の私は冷静に問いつづけていた。

「失礼ですが、もしかしたらカメを拾った男の子のお母さんですか？」

「え？　いえいえ、亮くんがいたのは反対のおとなりさん。ずいぶん前に引っこされたけど」

「引っこし？」

「亮くんのお父さんが会社をやめて、鹿児島のいなかに帰ることにしたそうで。亮くん、学校でいじめにあったりもしていたようだから、それもあってのことかもしれないけど」

「そうだったんですか……」

「カメのときもそうだけど、長崎さん、亮くんがいなくなってから落ちこんで、またやせてしまってね」

「待ってください」

⑤話の意外な流れに混乱した。

「カメのとき？　長崎さん、カメがもらわれていったとき、落ちこんでいたんですか？」

「それは、ねえ。だって、子供たちが毎日あれだけ集まって、わあわあやっていたんですもの。一気に静かになって、がっくりきちゃったんじゃないかしら」

「でも……じゃあ、なぜ長崎さんはカメを手放したんでしょう」

返事が一拍おくれた。周囲を気にするように四方へ視線を走らせたあと、彼女は「子供たちの、お母さん」と声をひそめた。

「カメのこと、お母さんたちのあいだでは結構、問題になってたのよ。カミツキガメって凶暴なんでしょう？　子供たちが指を食いちぎられたらどうするんだって、中にはうるさくさわぎたてる人もいて。長崎さんにしても、やっぱり子供たちが心配だったんでしょうね。カメのもらい手を探そうってdテイアンに、すんなり同意したそうだから」

そして間もなくもらい手が見つかり、その三ヶ月後に亮くん一家は引っこしていったのだという。

「長崎さん、最後まで亮くんのことを気にかけていたわ。鹿児島では友達ができたのかしらって。※⑲内弁慶だからこっちの学校ではうまくいかなくて、でも、あのカメがいたあいだだけは、長崎さんの家で他の子供たちと仲良くやってたのよ。だから、よけいにやるせなかったんでしょうね、長崎さん」

主婦の声を聞きながら、私は絶望的な思いで一年前、自分が書いた原稿を思い起こしていた。

一人のおばあさんとカミツキガメ、そして子供たちが織りなすドタバタ劇。奮闘の末に救世主が現れて、一件落着。なんてことだろう、と奥歯をかみしめた。なんというまちがいを私はおかしてしまったのだろう、と。

⑥主婦の話を聞いた夜、帰宅してすぐに私は取材のテープを探した。トラブルなどが生じた際に備え、取材で回したテープはすべて保管してあった。一年前の長崎さんの声もその中から見つかった。

カセットデッキに収め、どきどきしながら再生のスイッチをおした。おっとりとした長崎さんの声が一年の時をこえてよみがえる。

その話に耳をかたむけるにつれ、私の視界は涙でゆがみはじめた。あまりにもおそすぎる※⑩悔恨の涙だった。

――ええ、それはそれはよく食べるカメでしてねえ。市販のえさとあわせて、ときどき生魚なんかもあげていたんですけど、大きな切り身をばくっと一口で。もう、子供たちはおもしろがっちゃって。こぞって家から魚を持ってくるようになって、おかげでガメラが市販のえさを食べなくなってしまって。肥えるんですねえ、カメも舌が。

――亮くんがね、約束してくれたんですよ。ガメラを見習ってぼくももっと食べる、って。もともと食の細い子で、好ききらいも多くて、心配してたんです。それが亮くん、本当にガメラを見習ってよく食べるようになって。とくに、大きらいだった魚を食べはじめたのにはびっくりしました。……いえいえ、魚ぎらいだったのは亮くん。ガメラはもともと魚好きでしたよ。

――一度、ガメラが水そうから脱出したことがあって。それはそれは大あわてで、子供たちみんなと家中を探しまわりました。大騒動ですよ。さんざん探して、結局、居間のテレビ台の裏から見つかったんです。子供たちは大喜びで、亮くんなんて泣いちゃって。よかった、ガメラが生きててよかったって、わんわん泣いてみんなに笑われて……。本当に、ガメラが大好きだったのよねえ。

――よく亮くんといっしょにぼんやりガメラをながめたものです。この子は一体どこで生まれて、どうやってここまでたどりついたんだろうね、なんて言い合いながら。⑦亮くん、川岸でガメラと会ったとき、すごくさびしそうに見えたんです。

――亮くん、うちの孫が小さかったころと似てるんです。内気で、泣き虫で、おばあちゃんおばあちゃんってたよってくって。ひとりぼっちで、よたよた歩いていて、だから放っておけなかったって。

れて。でも孫は成長して、今は外国でしょう。もう、おばあちゃんなんて忘れちゃったかもしれないけど。

――⑧今から思うと、なんだか夢のようだったわ。子供たちの笑い声がいつも家の中にひびいていて、ガメラのおかげで亮くんにも友達ができて、どんどん笑顔が増えていって……。私ね、あのカメが私を竜宮城へ連れて行ってくれたと思っているんですよ。ええ、いい夢を見させてもらいました。

――新しい飼い主さんは良さそうな方でしたよ。他にもゾウガメやリクガメを飼っているそうで、本当にカメにはおくわしいようで。安心しておゆずりしました。心配だったのは亮くんで、なにしろ最後までいやだ、ガメラ行っちゃいやだって泣いていたから。ごめんね、亮くんって、私にはあやまるしかできなくて。だってねえ、私がこんなおばあさんでなかったら、そんなことにはならなかったかもしれないのに。

――え、ほっと一安心？　はあ……お茶、おかわりはいかがですか？　本当？　いえいえ、なんのおかまいもできませんで。

――今、思うことは……あの子、元気かしらって。本当に、新しいところでもちゃんと食べていればいいんですけど。

（森絵都「竜宮」より）

〈語注〉
※① 快諾…快く引き受けること
※② カセットテープ…「カセットデッキ」（148行目）に入れて録音・再生する物
※③ 話が脱線するきらい…話が別の方向にそれてしまいがちなこと
※④ 話をしめの方向へと誘導した…話を終わらせようとしたということ
※⑤ 若干のそご…意見や物事が少しくいちがうこと
※⑥ ほだされて…つい同情してしまって
※⑦ 乖離…へだたり
※⑧ 心筋梗塞…心臓の病気の名前
※⑨ 内弁慶…家の中では強がっているが、外では弱気なこと
※⑩ 悔恨…あやまちをくやむこと

〔設問〕　解答はすべて、解答らんにおさまるように書きなさい。句読点なども一字分とします。

一　═══線a「オ」（5行目）、b「ホウカゴ」（64行目）、c「ユウソウ」（82行目）、d「テイアン」（137行目）のカタカナを、漢字で書きなさい。

二　――線②「長崎さんを〜イメージはおおかた固まっていたのだ」（41〜42行目）とありますが、「私」が持っていた「イメージ」とはどのようなものでしたか。それがわかる二十五字以内の表現を、これより前の本文からぬき出して答えなさい。

三　48行目から69行目までは「長崎さん」が話したことですが、そのすべてではありません。ここにはどのような言葉が並べられていると考えられますか。次の中から ふさわしいものを一つ選んで記号で答えなさい。

ア　「私」があらかじめ持っていたイメージと重なる内容を語ったものとして、「私」の印象に残った言葉。
イ　「私」が想像もしなかったような大変な出来事について語ったものとして、「私」の印象に残った言葉。
ウ　「長崎さん」が語った「カミツキガメ」の飼い方の特に注意する点として、「私」の印象に残った言葉。
エ　「私」の質問にたいして「長崎さん」が反論するように答えた言葉として、「私」の印象に残った言葉。

四　――線①「前日も〜意識を失いかけたりもした」（37〜38行目）、――線③「九十分間〜記事に取りかかった」（71行目）とありますが、これらの部分から「私」が記事をどのように書いていったことがわかりますか。説明しなさい。

五　――線④「記事のできには自信があった」（95行目）とありますが、この時「私」が持った「自信」とはどのようなものですか。説明しなさい。

六　――線⑤「話の意外な流れに混乱した」（128行目）とありますが、「私」はなぜ「混乱した」のですか。説明しなさい。

七　――線⑥「主婦の話」（146行目）とありますが、これについて、以下の問いに答えなさい。
（1）「主婦の話」から、「私」は「長崎さん」についてどのようなことを知ったのですか。説明しなさい。
（2）また、「私」は「亮くん」についてどのようなことを知ったのですか。説明しなさい。

八　152行目から178行目までは「長崎さん」が話したことですが、ここにはどのような言葉が並べられていると考えられますか。次の中からふさわしいものを一つ選んで記号で答えなさい。

ア　取材したときには「私」が特に「重要なポイント」だと考えてノートに書きつけていた言葉で、「長崎さん」と「亮くん」、「カミツキガメ」の交流がいきいきと語られていた言葉。
イ　取材したときには「私」が「他愛なくもほほえましい事件」の内容を表すものとして期待していた言葉で、「私」はとてもよくおぼえていたが、残念ながら記事にできなかった言葉。
ウ　取材したときには「私」が早く帰ろうとあせっていてよく聞かなかった言葉で、「私」もよくおぼえていなかったが、やはり「カメの話」とは関係がないことが語られていた言葉。
エ　取材したときには「私」が「本筋」からは「脱線」していると感じた言葉で、「私」の印象には残らなかったが、本当は「カメの話」の中でとても大事なことが語られていた言葉。

九　――線⑦「亮くん、〜放っておけなかったって」（164〜165行目）とありますが、「亮くん」には「ガメラ」が「すごくさびしそうに見え」、「ガメラ」を「放っておけなかった」のはなぜだと考えられますか。「亮くん」がどのような子供だったのかということをふまえて、説明しなさい。

十　――線⑧「今から思うと、〜いい夢を見させてもらいました」（169〜171行目）とありますが、ここには「長崎さん」のどのような思いが表れていますか。「カメが私を竜宮城へ連れて行ってくれた」という表現がどのようなことを表しているかにふれながら、説明しなさい。

十一　〰〰線「今、思うことは……あの子、元気かしらって。いいんですけど」（78行目・178行目）は「長崎さん」の同じ言葉です。
（1）78行目では、「私」はこの言葉をどのように理解していたのですか。説明しなさい。
（2）この言葉には「長崎さん」のどのような思いがこめられていたのでしょうか。説明しなさい。

十二　「長崎さん」にとって「亮くん」はどのような子供だったのでしょうか。全体をふまえて、一五〇字以内で説明しなさい。

〈問題はここで終わりです〉

麻　　布

（２０１３年度）

受験番号	
氏　名	

国語解答用紙

一

a

b

c

d

二

三

四

五

六

七

1

2

八

九

十

十一

1

2

十二

（合　計）

（整理番号）